リオデジャネイロオリンピック開会式にみる〈ブラジル〉の表象

愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻
「研究演習（ラテンアメリカ文化・社会）」履修者
加藤真衣・鳥居愛・味村由衣・竹田みさき
吉村文花・祝優綺・田中亜依・堤内葵
野老愛良・村瀬安美・石田匡助・鈴木將之
土井柚里奈・箕浦千晶・米田萌
准教授　渡会　環

はじめに

本論文は 2016 年にリオデジャネイロにて行われた第 31 回オリンピック競技大会（以下、リオオリンピック）においてブラジルが開会式を通して伝えたかった〈ブラジル〉、すなわちブラジルによる〈ブラジル〉の表象を分析することを目的とする。

オリンピックの開会式とは開催国にとって世界中に自国をアピールし表象していくまたとない機会である。アボリジニとオーストラリアの少女を中心に描かれる「民族の融和」を表現し世界へのメッセージを発信した 2000 年シドニーオリンピック、また大量の花火や多くの中国要素を含んだパフォーマンスも用いて伝統文化や優れた国の姿を見せることにより他国にとって神秘的であった中国に新たな国際的イメージを構築した 2008 年北京オリンピックをみても、その影響力は絶大だといえるだろう（田中 2012；　周 2012）。その開会式の中でブラジルはいかにして〈ブラジル〉を世界に認識させようと試みたのだろうか。

ブラジルによる〈ブラジル〉の表象を分析する際には、演じる側とそれを見る側の関係の考察も必要である。文化人類学におけるパフォーマンス研究を牽引してきたマカルーンは、現代のオリンピックにおける演じる側と見る側の関係性は、オリンピックが有する「スペクタクル」な特性に基づいていると指摘している（マカルーン 1988： 391-403）。視覚的かつ象徴的なコードが最重視されるスペクタクルでは、演じる側と見る側があってスペクタクル自体が成立する。だが、スペクタクルでは、伝統的な儀礼とは異なり、演じる側と見る側の役割が明確に分けられているので、見る側は「距離をおいて観察する見物人に徹する」（マカルーン 1988： 433）こととなる。

この議論からもうかがえるように、本稿で演じる側と見る側の関係を考察する場合、観客がリオオリンピックの開会式を実際にどのように解釈したかという問いも生じる。シドニーオリンピックの開会式を分析した田中は、見る側に焦点を置いて研究をすると「一見、自然なつながりや意味づけ、疑う余地のないほど強固な因果関係のなかにおかれている映像が、いま見えているものとは別の形で、また余剰を含んだものとして解釈されることが可能」（田中 2012： 176）になると指摘する。しかしながら、そもそも、視覚が重視されるスペクタクルでは見る側の「『みる（sight）』以外の参加形態がとかくおざなりになり、『み落とす（oversight）』の心配が増える」（マカルーン 1988： 396）のが一般的である。「誇張され、拡大され、仰々し」（マカルーン 1988：393）くあるものの、「スペクタクルは『現実』を『単なる外観』の域から救出し、新たな思考と行動の糧として、喚情的な形で再提示」（マカルーン 1988： 442）さえする。したがって、マカルーンのオリンピックのスペクタクルに基づく演じる側と見る側の関係性の議論は、リオオリンピックで新たな〈ブラジル〉がブラジルによってどう示され、その〈ブラジル〉についての認識が変わる可能性を考察する本稿に有効な分析の枠組みを提供する。

リオオリンピック公式サイトによると、リオオリンピックの開会式は、「ブラジルの素晴らしい音楽の遺産に社会的メッセージと気候変動危機への警鐘を込めた」[1]形で構成されたとあるが、実際にはどのようなパフォーマンスが行われたのか、まず本稿でそれを整理する。プレ・パフォーマンスとしてリオの人々がスポーツを楽しむ映像が会場となったマラカナン競技場のディスプレイに映し出される。フィールドにはシートを持った多数のパフォーマーが登場し海が表現される。観客を巻き込みながらのポルトガル語でのカウントダウンが始まり、それが終わると海には渦巻きが誕生し、渦巻きの中心、すなわち、ステージの中央には一本の木のプロジェクションが残る。その後、第9代国際オリンピック委員会（IOC）会長の紹介と国家斉唱が行われ、それが終わると会場にプロジェクションマッピングで海、生命の誕生と細胞分裂、虫や森林、蝶が順々に現れる。

続いて先住民が登場しゴムを用いて、列になり交差したり、円になったりと多彩な動きを見せながら先住民の編み物文化を彷彿とさせるパフォーマンスを見せる。そののちに音楽も変わり照明が海原の嵐を思わせるように点滅すると、ポルトガル人が船に乗って登場する。ポルトガル人の船が先住民の作る円の中へと入っていくとポルトガル人、先住民が出会い、顔を見合わせる。ポルトガル人が船と共にフィールドから退場すると先住民も一斉にゴムから手を放し退場する。その後、農作業を行うアフリカからの奴隷たちが列をなし一定のリズムで会場の端から登場してくる。奴隷たちがフィールドの中央へ到達する頃に、シリア・レバノンからの商人が、少し間をおいて日本からの移民が次々と登場する。

商人や日本からの移民が退場すると、雰囲気は一変し、ビル群がプロジェクションマッピングで映し出されその上をパフォーマーがビルからビルへと飛び移っているかのように移動していく。彼らが行き着く先にはビルを模したステージが登場しており、そこで街を駆け回るスポーツであるパルクールを思わせるパフォーマンスが行われた後に、パフォーマーが協力してビルの上から運び出される箱をフィールド上に積み上げ壁を作り上げてから再び崩すと、そこには飛行機が登場してくる。

そこからライト兄弟に次いで飛行機の発明、飛行に成功した、ブラジルの飛行機の父、サントス・デュモン（Alberto Santos-Dumont）の飛行が演出される。夜のリオの空へと飛び立つシーンが映像で流れた後、会場には名曲『イパネマの娘』が流れ、その音楽とともにブラジル人モデルのジゼル・ブンチェン（Gisele Bündchen）が登場する。この曲に続く形でこれ以降、リオで生まれたさまざまな音楽が披露される。ポップなミュージックに合わせダンスやカポエイラが披露される。

カポエイラが終わると突然花火を持ったパフォーマーが登場しその後に、赤一色のグループと金銀赤三色のグループとが争っているように向き合っているが最後にはすべてが混ざり合い、ブラジル人女優レジーナ・カゼー（Resina Casé）の「私たちの違いを祝う（celebrar as nossas diferenças）」との掛け声の後、ジョルジ・ベン（Jorge Ben）が歌う『país tropical』に合わせてそれまでに登場していたパフォーマー全員で踊る。

明るい照明が落とされ、環境破壊に警鐘を鳴らす意が込められた映像が流れる。リュックを背負った少年が登場し、彼にスポットライトがあたる苗木を発見し持ち帰る。その後、後部には花や植物が載せられたカラフルな自転車の先導の元、先ほどの少年と各国の選手たちが入場する。これらのパフォーマンスに、ブラジルの「多様性と寛容」、「豊かな資源や大地」、「社会格差から生み出される文化の豊かさ」、「環境保全におけるリーダーシップ」が示されていた。

ブラジルの多様性を構成すものとしての移民

先住民、ポルトガル人、アフリカからの奴隷、中東およびアジアからの移民のシーンがあったのは、今回の開会式の演出の軸となったテーマの一つ「多様性（diversity）」と「寛容　（tolerance）」[2]を表

[1] これについては　リオオリンピックの公式サイト(https://www.rio2016.com/en/ceremonies)　を参照した。（最終閲覧日 2016 年 12 月 8 日）

[2] これらの表現については　国際オリンピック委員会公式ホームページニュース記事 Rio ready to welcome the world

わすためであった。このテーマを、様々な民族が共存しその中で新たな文化が創造されてきたブラジルの歴史を再現することで、訴えたのである。

このテーマはパフォーマンスの冒頭から表現されていたもので、細胞分裂や自然を連想させるプロジェクションマッピング自体が、人類は根本的には全く差異のない存在であることを示す意図をもっていたと考える。しかしその後、「被植民者」と「植民者」で区別されることになるブラジル先住民とポルトガル人が出会い、両者が「他者」である相手を互いに体を動かしながらあらゆる角度から観察するシーンが演出される。そして、この「出会い」は、見方によって異なった二つの解釈ができる。一つは互いが互いをにらみ合い敵対心を持ち、ポルトガル人はブラジルを侵略したという出会いをネガティブに描いたという見方、もう一方は互いが互いを物珍しい存在に出会ったかのように見合い、「先住民は知恵を授かった」、「ポルトガル人はあくまでも訪問者であった」という解釈である。つまりは、先住民はポルトガル人を受け入れたという出会いをポジティブに演出したという見方である。その後に登場した農作業をしているものや足かせのように足に大きな箱をつけて列をなして歩くアフリカからの奴隷についても、奴隷制度という負の歴史の表現とも捉えることができるし、後にアフリカ文化を演出に入れていることからも彼らもブラジルを構成する重要な人々と描いたとも読める。

このほかにもブラジルを構成してきた移民は様々だが、開会式で選ばれたのは、シリアとレバノンから渡ってきた商人たちが箱を模した骨組みを持ち登場し、さらには赤い旗や傘の骨組みを持った日本人であった。日本人の登場が原爆投下時間に合わせてのものであった。これらは先住民とアフリカからの奴隷と同様に各民族への敬意や理解を示すとともに、今日紛争の絶えない中東地域の問題、核兵器の問題を想起させる手段として選択されたといえる。これまでオリンピックが開催されてきた欧米、アジアではなく、南米というポジションから、「多民族共存」、「平和」、そして本稿の最後で述べる「環境問題」といった世界レベルの問題を提示していくのである。

この歴史のパートにおいてブラジルが伝えたかったことは、「多様性」を訴えるうえで、ブラジルが様々な民族を受け入れてきたという「寛容」といえるだろう。

ブラジル経済を支える代表的産業

ブラジルが開会式で見せたかったものの 1 つが、「BRICs」という言葉が生まれるほどに目覚しいとされる近年のブラジルの経済発展の姿である。国内総生産（GDP）は 2015 年までに 1 億 8000 万ドルに上り、世界第 9 位の座につき、かつラテンアメリカ最大の経済大国となっている。2010 年にはイタリアを抜き、2011 年にはイギリスをも上回った[3]。ブラジルの経済発展を支えた産業の中で「ゴム」、「農産物」と「航空機」の 3 つが、開会式では選択された。

開会式の冒頭の先住民のダンスのシーンでは、天井から吊るされた無数のゴム製ロープをインディオが編んで光を操るという演出をしていた。これはブラジルインディオの伝統的な織物を表現すると同時に、伸び縮みする「ゴム」を用いて、2013 年の時点でも世界的に 5.1 パーセントのシェアを占めるブラジルのゴム産業の豊かさをアピールしていたのである[4]。

移民からの農耕シーンでは、サトウキビ畑を思わせるような演出だった。ブラジルではサトウキビ以外にも、コーヒーやとうもろこしなどの農産物の生産が盛んである。また、近年サトウキビを用い

（https://www.olympic.org/news/rio-ready-to-welcome-the-world）（2016 年 12 月 15 日最終閲覧日）と YOMIURI ONLINE.リオ五輪開会式、「寛容」をテーマに表現.

（http://sp.yomiuri.co.jp/olympic/2016/topic/20160805-OYT1T50043.html?from=ytop_ylist）（2016 年 12 月 15 日最終閲覧日）を参照した。

[3] このデータについては　外務省主要経済（http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000018853.pdf）を参照した。（最終閲覧日 2016 年 11 月 17 日）

[4] このデータについては 農林水産省ブラジルの農林水産業概況（http://www.maff.go.jp/j/kokusai/kokusei/kaigai_nogyo/k_gaikyo/attach/pdf/brz-1.pdf）を参照した。（最終閲覧日 2016 年 12 月 1 日）

たバイオエタノールの生産が急激に増え、世界でトップのシェアを誇った。さらに、ブラジル経済を支える自動車産業などにも良い影響を及ぼしている。

ブラジルが現在、従来の自動車製造のみならず、環境問題が騒がれる昨今に注目されるバイオエタノールを用いた燃料自動車の製造にまで産業を拡大できているのがその良い例である[5]。これらのパフォーマンスはゴムやサトウキビのアピールだけを目的としたものではない。それらはまた、ブラジルが緑豊かな広大な土地を有していることや、それを統括して生産高を伸ばす世界有数の農業生産国であることもアピールしているのである。

また、終盤に登場した「飛行機」もまた産業アピールの一環であった。はじめにでも触れたサントス・デュモンによる飛行は、一見するとただブラジルの歴史を描いているあるいはリオの美しい夜景を描いたシーンに見える。しかし、このシーンは近年著しく発展してきた「航空機」産業のアピールでもあったのだ。ブラジルのエンブラエル社といえば、ブラジル最大の輸出企業であり、ボーイング社、エアバス社、ボンバルディア社に続き、世界第 4 位シェアを誇る旅客機メーカーである[6]。その飛行機は日本の空でも活躍している。開会式における飛翔のパフォーマンスが与えたインパクトから、ブラジルは観客が新しいブラジルの産業に興味を抱くことを目的としていたのではないだろうか。

以上のことから、今回のパフォーマンスを経済・産業的観点でみてみると、あるブラジル像がみえてくる。つまり、ブラジルが見せたかった〈ブラジル〉とは、その肥沃な大地と豊富な資源でもって行ってきた古くからの農産業に加え、先進国でも今現在生産競争が続くバイオ燃料や航空機といった近代的かつ、最先端な産業まで、多様な産業の担い手である、というものだったのである。

ブラジルの社会格差の象徴、ファヴェーラ

これまで述べてきたパフォーマンスの場面ではもちろん、開会式全体を通して音楽がそれぞれの場面の演出で重要な役割を担っていた。例えば、『イパネマの娘』であればリオの街の詞的な美しさの表現に役立っていた。そのため、多くのジャンルのブラジル音楽が演奏されることになり、ブラジルにある音楽の豊富さが示され、音楽産業の発展をも彷彿させた。音楽という面では、新しい音楽の発信地としてスラムである「ファヴェーラ（favela）」が注目され、ファヴェーラ生まれの音楽や歌手が多く登場した。開会式の演出を担当したフェルナンド・メイレレス（Fernando Meirelles）はファヴェーラを舞台にした映画『シティ・オブ・ゴッド』の監督である。この映画は米アカデミー賞で四部門にノミネートされ、国際的な反響も大きく、犯罪の温床としてのファヴェーラを 21 世紀のブラジルのイメージとしてしまった一因でもある（Antunes 2014: 15）。

奥田はブラジルのファヴェーラ、社会格差について次のように述べる 。

ブラジルでは「スラム」は一般的に「ファヴェーラ favela」と呼ばれている。これはいわゆる不法占拠地を表す言葉として使われると同時に、単に合法非合法ではなく、「低所得者・貧困者の居住区」という意味でもある。〔中略〕1960 年代末から 70 年代の奇跡と呼ばれた経済成長は貧困を減少させる要素となっておらず、ここ 20 年の間、貧困層と富裕層の割合は改善されていない。ほぼ変動もなく 10 パーセントの富裕層が所得全体の 50 パーセントを得ており、全体の下層に位置する 50 パーセントが所得全体の 10 パーセントを得ている(奥田 2009：138)。

ファヴェーラを見ただけでも分かるように、ブラジルには富裕層と貧困層の間に大きな社会格差が

[5] このデータについては　ゴールドマン・サックス・アセット・マネジメント BRICs 特集 ブラジル（http://www2.goldmansachs.com/japan/gsitm/column/emerging/brics_sp/brazil.html）を参照した。（最終閲覧日 2016 年 11 月 17 日）

[6] このデータについては　航空機産業の現在・過去・未来 前編（https://www.okb-kri.jp/_userdata/pdf/report/117_koukuukisanngyou1.pdf#search='%E3%83%96%E3%83%A9%E3%82%B8%E3%83%AB%E8%88%AA%E7%A9%BA%E6%A9%9F%E7%94%A3%E6%A5%AD+%E7%99%BA%E5%B1%95+%E8%BF%91%E5%B9%B4'）を参照した。（最終閲覧日 2016 年 11 月 17 日）

ある。しかし、リオオリンピックの開会式ではこの社会格差には焦点をあてず、あくまでもパフォーマンスの一部としてファヴェーラが取り上げられた。

実際、開会式でファヴェーラ発の音楽が演奏されたのは、『イパネマの娘』の演奏された直後である。優雅なリズムが一転し、ファヴェーラ発祥の「ファンキ（funk）」のビートに変わり、ファンキ歌手ルジミラ（Ludmilla）が『Rap de felicidade』を歌い始めた。音楽の変化に合わせて、会場の雰囲気も落ち着いた雰囲気から、カラフルで派手な雰囲気に変わり、視覚と聴覚に訴える演出だった。ファンキに次いで、エルザ・ソアレス（Elza Soares）がアフロ・サンバの名曲『canto de ossanha』、ゼカ・パゴジーニョ（Zeca Pagodinh）とマルセロ D2（Marcelo D2）が『Deixa a vida me levar』をパゴーチ調、ラップ調で交互に披露、MC ソフィア（MC Soffia）とカロル・コンカ（Karol Conka）が女性と黒人の活躍を歌うラップを披露した。

オリンピックの開会式という世界が注目する場でファヴェーラという負の面をあえて出したかのようだが、演出家であるフェルナンド・メイレレスの意図は別にあったと考えられる。以前彼はインタビューで映画『シティ・オブ・ゴッド』について「この映画をやると決まったとき、ぼくはファヴェーラにリサーチに行ったんだ。そのとき、残酷な現実をまざまざと見せつけられるものだと予想していた。でも、実際は全く反対で、ファヴェーラは楽しい場所だったんだよ。みんながいかに毎日を楽しく過ごすかを心得ていて。」とファヴェーラについて語り、インタビューワーの「犯罪組織を描いていながら、それについて否定も肯定もせず、ありのままに描く」というコメントに同意している[7]。『シティ・オブ・ゴッド』は結果的に世界に対して、ファヴェーラの負のイメージを強く与えることになったが、監督が描いたのはファヴェーラの二面性だった。今回の開会式でも、カラフルにライトアップされたファヴェーラを模した舞台で、ファヴェーラ発祥のモダンミュージック、ダンスを披露することで改めてファヴェーラの両面を描くことを試みたのである。

環境問題におけるブラジルの立ち位置

リオデジャネイロ開会式の最後は、目を背けてはならならない世界の環境状況を主題としたパフォーマンスであった。これは環境問題について世界へのメッセージの強いものとなった。開会式の最中に一人の少年が登場したのち、わかりやすいグラフや図を効果的に使いながら、地球温暖化によって引き起こされた各地の危機迫る状況を表す映像が流れる。映像終了後、会場にて先ほどの少年が木の苗を植え、その苗から緑が広がっていく。その後画面が再び映像に変わり、その映像では人々が種を植え植物が育っていく様子を映し出している。

この開会式の演出からわかるように、スポーツとリオデジャネイロという枠組みにとどまらず、国際的な課題である環境汚染についてまでブラジルは言及した。他国のオリンピック開会式では取り上げられることのなかった環境問題について、「オリンピック開会式」という世界中が注目する場で取り扱うことから、ブラジルは世界規模での問題である地球環境への関心が高いことがわかる。そして細胞分裂の描写が開会式でパフォーマンスされたが、これは自然界に話が戻り、ブラジルが先陣を切って環境問題に皆で率先して取り組んでいこうという表明をしている。実際にブラジルでは、1992 年に国連環境開発会議が開かれており、この時も同様に世界の人々に環境問題について再考させている。この環境問題に関する一連のパフォーマンスによって、ブラジルのリーダーシップを自ら宣言したのだ。これは南米で初めてオリンピックの会場として選ばれたブラジルが、環境破壊をまねく原因をつくってきた先進国ではなく、また先進国の環境規制によって自国の発展が妨げられることを恐れる発展途上国でもない、特別なポジションであったから可能であったのではないか。

おわりに

今回のパフォーマンスで、移民の部分では「多様性と寛容」、産業・経済の部分ではブラジルが経済

[7] インタビューは以下の雑誌に掲載されている。『CUT』　2003 年 7 月号、No.151、109 ページ。

大国であること、そして、環境の部分では世界規模の問題となっている地球温暖化についてアピールしたことから、ブラジルはこの地球上に住む人々の多様性を認め尊重し、かつ世界全体を視野に入れて物事を考えており、南米独自の視点からこれからの世界をリードしていこうとしている、と捉えることができる。

ここでいう多様性はこれまでのオリンピックで演出されたものとは少し異なる。冒頭で例に挙げたシドニーオリンピックや北京オリンピック開会式でも、アボリジニや中国民族の民族衣装を纏った子供達を登場させ、国内移民の多様性を表現してはいるが、リオオリンピックで表現したのはそれだけではない。ブラジル選手団のエスコート役にトランスジェンダーのモデルを起用することで性に関する「多様性」も表現したのである。

また、開会式のパフォーマンスの解釈を見る側に委ねたことにも、多様性に対して寛容であることを表わしている、と指摘できる。例えば、植民者ポルトガル人と先住民が顔を見合わせるシーンにみられたように、田中（2012）もシドニーオリンピックの開会式での演出とオーディエンスの関係でも指摘しているが、植民地化の結果をどう捉えるかといった答えが明確に出せない問いを挟むことにより、余剰ある解釈を見出すことが可能となり、潜在的な意味と多声的な内容を呼び起こし、演出内容を単なる真実や事実であるだけでなく、別の効果をもたらしたり、引き出したり、引き起こしたりする。これが一つの「真実」を追求せず、立場が変われば解釈も異なることを観客に意識させ、その理解が多文化共生の一歩であることを知らしめたのではないだろうか。

この開会式を通して、これまで我々が各々もっていたブラジルの表象はマカルーンが述べたように、ブラジルが世界に表現したかったことを「み落とす」人がいたかもしれないが、多くの人の〈ブラジル〉の認識を変化させることにフェルナンド・メイレレスをはじめとする演出家達はやってのけたと言えるのではないだろうか。このことを考えると、ブラジルが様々な場面で成長してきたこの時期に南米大陸初のオリンピックがリオで開催されたことは大きな意味がある。このオリンピックを皮切りにこれから〈ブラジル〉の表象に自らも加担して作り出し、国際社会でのプレゼンスを高めているブラジルは表象研究の分野において重要な役割を果たしていくだろう。

参考文献一覧

Antunes, Gabriela. 2014. “How to be a Good Brazilian: The Image of Brazil in Contemporary American Cinema”, in Wood, Naomi Pueo, ed. *Brazil in Twenty-First Century Popular Media: Culture, Politics, and Nationalism on the World Stage*, pp.13-34.

『CUT』　2003 年 7 月号 No.151　109 ページ

小暮修三．2008.『アメリカ雑誌に映る〈日本人〉』東京：青弓社

マカルーン、ジョン・J．1988.「近代社会におけるオリンピックとスペクタクル理論」マカルーン、ジョン・J 編『世界を映す鏡－シャリヴァリ・カーニヴァル・オリンピック－』（光延明洋ほか訳）東京：平凡社　387-442 ページ

『ニューズウィーク日本版』　2006 年 6 月 14 日　33 ページ

奥田若葉．2009.「第 5 章　ブラジリアにおける二つの不法問題」『ブラジルの都市問題－貧困と社会格差を超えて—』横浜：春風社　131-153 ページ

サイード、エドワード・W．1993a.『オリエンタリズム上』東京：平凡社

——．1993b.『オリエンタリズム下』東京：平凡社

田中東子．2012.「第 5 章 メディアスポーツとジェンダー－ジェンダー化される身体とミクロポリティカルなスポーツ空間—」『メディア文化とジェンダーの政治学－第 3 波フェミニズムの視点から—』京都：世界思想社　165-194 ページ

周星．2012.「北京オリンピック開会式と『イメージング・チャイナ』」『文明 21』（西村真志葉訳）No.29　81-106 ページ

参考ウェブサイト一覧

外務省ブラジル基礎データ http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/brazil/data.html8 （最終閲覧日 2016 年 11 月 17 日）
外務省主要経済指標 http://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000018853.pdf （最終閲覧日 2016 年 11 月 17 日）
ゴールドマン・サックス・アセット・マネジメント BRICs 特集 ブラジル
http://www2.goldmansachs.com/japan/gsitm/column/emerging/brics_sp/brazil.html（最終閲覧日 2016 年 11 月 17 日）
国際オリンピック委員会公式ホームページニュース記事 Rio ready to welcome the world
（https://www.olympic.org/news/rio-ready-to-welcome-the-world）（最終閲覧日 2016 年 12 月 15 日）航空機産業の現在・過去・未来 ~前編~
https://www.okb-kri.jp/_userdata/pdf/report/117_koukuukisanngyou1.pdf#search='%E3%83%96%E3%83%A9%E3%82%B8%E3%83%AB%E8%88%AA%E7%A9%BA%E6%A9%9F%E7%94%A3%E6%A5%AD+%E7%99%BA%E5%B1%95+%E8%BF%91%E5%B9%B4' （最終閲覧日 2016 年 11 月 17 日）
リオオリンピック公式サイト https://www.rio2016.com/en/live-blog-day-5 （最終閲覧日 2016 年 11 月 14 日）
高野良太郎・林幸秀.2015.「ブラジルの科学技術情勢」
https://www.jst.go.jp/crds/pdf/2015/FU/BR20151101.pdf （最終閲覧日 2016 年 10 月 6 日）
浮田泰.2016.「空を飛ぶ夢：ブラジルの知られざるヒーローサントス-デュモンの物語」
https://www.jal.co.jp/jalcard/service/img/agora/1603/special_1603.pdf （最終閲覧日 2016 年 10 月 6 日）
YOMIURI ONLINE.リオ五輪開会式、「寛容」をテーマに表現.
（http://sp.yomiuri.co.jp/olympic/2016/topic/20160805-OYT1T50043.html?from=ytop_ylist）（最終閲覧日 2016 年 12 月 15 日）